

「吳嘉禾六（二二三七）年四月都市史唐玉白收送 中外估具錢事」試釈

關 尾 史 郎

はじめに

最近刊行された『長沙走馬樓三国呉簡 竹簡』〔肆〕〔整理組（編）二〇一一〕（以下、「本書」と略記し、これからの引用は「肆+簡番号」で示す。尙々参からの引用も同じ）には、五六・二一枚の竹簡に混じり、五枚の木牘が収録されている。いずれの木牘も竹簡群とともに出土したため、本書に収録されることになったのだが、左に掲げる「吳嘉禾六（二二三七）年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事」（一七六三（二））。以下、「本牘」と略記⁽¹⁾も、その一つである。

ア都市史唐玉叩頭死罪白被曹勅條列起嘉禾六年正月一日訖三月卅日吏民所

私賣買生口者收責估錢言案文書輒部會郭客料實今客辭男子

唐調雷逆郡吏張橋各私買生口合三人直錢十九萬收中外估具錢一萬九千謹

列言盡力部客收責送調等錢傳送詣庫復言玉誠惶誠恐叩頭死罪死罪

四 月 七 日 白

(肆一七六三(一一))

本牘が狭義の文書であることは、その用語からして疑うべくもないが、文書としての内容や形式もさることながら、そもそもなにゆえに竹簡群とともに出土したのか、という問題がある。これは、本牘の性格や機能を考える上でも避けて通ることのできない問題である。

したがって本稿では、最初に本牘の出土状況を検討した上で、内容と形式について先行研究の成果に学びながら分析を試みることにしたい。⁽²⁾

一 出土状況——伴出竹簡との関連性——

竹簡「肆」には、出土時点で塊状(坨)になっていた二六の簡牘群が収録されているが、本牘を含むI c 1⁽³⁾という塊は、一七一九から本牘までの合計四六枚から構成され、本牘は十数層に重ねられた竹簡群の最下層に置かれていた「整理組(編)二〇一一・七七二頁」⁽⁴⁾。またその直上には、一七五八から一七六三までの六枚の竹簡が横一列に並んでいた。

四六枚のうち、三七枚(一七二九～一七五七のうち、一七三三と一七五六を除く)は名籍簡、一枚(一七二三)は賦税納入簡である(一七五六は不詳)⁽⁴⁾。このうち名籍簡は戸主(戸人)簡から判断する限りでは、全て陽貴里のものだっ

たようである。したがっていずれも本牘とは直接の関連を有していないものばかりである。これに對して、本牘の直上に接していた一七五八以下の六枚は、内容上、本牘との深い関わりが予測されるものである。發表されている釈文を掲げておく。

イ □市吏唐正謹列起嘉禾六年正月訖三月卅日受吏民賣買生口……

(肆一七五八)

ウ □土文錢賣女生口易直錢四萬嘉禾六年正月廿□□貸？男子唐調收中外

(肆一七五九)

エ 匱具錢八千

(肆一七六〇)

オ 大女依汝賣女生口葉直錢六萬嘉禾六年正月廿日貸男子雷蓮收中外做

(肆一七六一)

カ 具錢九？千

(肆一七六二)

キ 大女劉佃賣男生口得直錢五萬嘉禾六年三月廿八日□縣吏□□收中外做

(肆一七六三)

ウの唐調の名が、本牘にも見えているほか、写真からイの「市吏唐正」は「市史唐玉」と、またオの「雷蓮」は「雷逆」とそれぞれ釈読できるが、唐玉も雷逆も本牘に見えている。⁽⁵⁾さらに本牘の「中外估具錢」は、二枚の竹簡に跨がって記されている「中外做具錢」に相当するし「估」と「做」は普通であろう、本牘とイの「起嘉禾六年正月(一日)訖三月卅日」は同じ期間を示しており、ウ・オ・キ三枚の年月日もこの期間内に収斂する。⁽⁶⁾

これらのうち、ウ・オ・キの三枚が同じ様式に則って書かれていること、そして「中外做具錢」を根拠にすれば、エ・カがこれに接続すること、この二点は一見しただけで了解される。エはウに接続し、カはオないしはキと接続するのだろう。⁽⁷⁾このうちオを試釈すると、左記のようになる。

「吳嘉禾六(二三七)年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事」試釈 關尾

第九十五卷

三五

女丁（大女）の依汝は、婢（女生口）の葉を売った。その値は六万錢だった。嘉禾六年正月二〇日、男丁（男子）の雷逆に貸^{もと}めて、中外做具錢□千を徴収した。

要するに奴婢売買に関わる記録なのだが、そこで問題とされているのは、年齢や身長など奴婢自身に関する情報ではなく、売買の当事者（売り手が依汝だが、雷逆が買い手だったことは本牘から明らかだろう）と価格（六万錢）、そして中外做具錢の額（□千）とその徴収年月日であり、奴婢自身に関してはかろうじて性別と名がわかる程度である。したがって奴婢自身やその所有権の移動自体に関する記録ではなく、所有権移動のもととなった売買にともなう、おそらくは価格に応じた中外做具錢の徴収に関するデータを記録するのが、これらの竹簡の主たる役割だったのであるまいか。イも含め、これら六枚の竹簡には上下二か所に編綴痕が確認できるので、⁽⁹⁾廃棄されるまで編綴されて保管されていたと判断できる。このうちイが表題簡だったことは、その文面から疑う余地がない。それでは、本牘はいかなる役割を負っていたのだろうか。

長沙呉簡の中に、州吏や軍吏などの家族の状況を記した竹簡があり、その本文を構成する簡（以下、「本文簡」）をはじめ、「謹列」の二字を含む表題簡や「集凡」から始まる集計簡などの存在が確認されている〔關尾二〇〇六〕⁽¹⁰⁾。勸農掾による調査結果が郷ごとにまとめて編綴されて県に当たる臨湘侯国に上達されたものだが、漢代の簿籍のよう⁽¹⁰⁾な、送り状に相当する簡が附されていない。しかし内容的にこれと密接に関連する本牘が三枚ほど紹介されている。詳細は王素氏の研究「王二〇〇九」にゆずり、⁽¹¹⁾ここにはその中の一枚を掲げておこう。

ク

東郷勸農掾股連被書_{（圖）}列州吏父兄人名年紀為簿輒料核郷界州吏三人父

兄二人刑踵叛走以下戸民自代謹列年紀以審實無_{（有）}遺脱若有他官所覺連

自坐_{（又）}嘉四年八月廿六日破萌保據

（丁二二—二五四三）

いずれも頭頂部に勘合の記号を有し（二）で示した、かつ「破萌（保據）」という文言で本文が結ばれているが、¹²その反面、「敢言之」とか「白」といった動詞を欠いているので、上行文書とは認めがたい。高村武幸氏は、これを「帳簿内容の保証証書（割符）」で、「送り状」の機能を兼備したものと推定している「高村二〇〇四」。それでは、本牘はどうだろうか。クから類推すると、やはり本牘も、表題簡イと本文簡ウキなどから構成された冊書の送り状としての役割を果たしたのではないだろうか。写真から判断する限りでは、竹簡よりもやや長いようだが、竹簡と同じように上下二か所に編綴痕が認められるので、竹簡とともに編綴された可能性も考えられる。おそらくは竹簡とあわせて、都市史の唐玉から臨湘侯国の金曹（掾）に宛てて送達されたのであろう。¹⁴ただし単なる送り状であれば、送達する旨を記せば充分だったわけで、本文簡の内容を丁寧に要約して繰り返し返す必要はなかったはずである。したがって本牘は、報告書としての意味も帯びていたのではあるまいか。クにも当てはまることだが、あえて本文と同じ竹簡を用いずに、木牘を使用したのは、送達後、必要に応じてこの部分だけを切り離し、文書として転用することがあったことを示唆させる。¹⁵

以上本節では、本牘の出土状況について、伴出竹簡との関連を中心に検討してきた。それではI c 1①の塊を構成している他の竹簡、とりわけその大半を占めている名籍簡とはいかなる関係にあるのか、という問題がなお残つ

ているが、その前に、本牘自体の検討に進みたい。

二 内 容

最初に本牘の試釈を掲げておく。

都市史の唐玉が恐れながら申（白）し上げます。曹からの命令（勅）を受け、嘉禾六年正月一日から三月三〇日までの間、吏・民で私的に奴婢（生口）を売買した者から回収した估銭を列記して言上致します。文書を調べ、急ぎ部会？の郭客に真実を調査させました。今、客が申すには、丁男（男子）の唐調・雷逆、郡吏の張橋が各々私的に奴婢（生口）を買い、三人合わせてその価格は一九万銭でしたので、中外估具銭一万九千を徴収しました、と。謹んで全力を尽くしたことを言上致します。部下？の客が調等の銭を回収して送って来たので、駅伝により送って庫に届けます。再度言上致します。玉が恐れながら、金曹に宛てて、四月七日に申（白）し上げます。

本牘が、嘉禾六（二三七）年四月七日に、都市史の唐玉から金曹（掾）に宛てて出された上行文書であることは疑いなくところである。最初と最後、二か所に「白」字が用いられているからである。

文中、男子の唐調と雷逆はそれぞれウ・オに見えている。張橋はキの県吏某に対応するものと思われるが、本牘では郡吏となっており、矛盾する。ただこの期間に行われた奴婢の私的売買は三件だけだったようなので、郡吏張橋と県吏某を同一人と見るほかない。⁽¹⁶⁾ それでは、奴婢の買い手である彼らが納入した中外估具銭とはどのようなも

のだったのだろうか。

中外估具錢のうち、「具錢」については、于振波氏が二枚の竹簡を紹介している。

ケ出具錢八萬一千爲行錢八萬五千二百九十五錢市嘉禾二年調布嘉禾三年正月卅

(壹五三五九)

コ出具錢三萬爲行錢三萬一千一百九十四錢市嘉禾二年調布嘉禾三年正月卅

(壹五三七九)

于氏は、「行錢」の「行」字を粗惡・濫惡の意味にとり、「具」字をその反対に完備・完全の意として、この二枚を粗惡錢と優良錢との換算率を示すものと解釈した「于二〇〇六(于二〇〇四)」。換算率が微妙に異なるが、于氏がふれていない左の二枚も参考になろう。

サ[□]具錢廿萬一千七百十七錢爲行錢卅五萬四千九百[□]

(參六七五一)

シ出行錢四萬二千五百八十九錢爲具錢三萬七千三百……[□]

(參七四三五)

とすると、「具」は税種を示すのではなく、錢貨の品質を示す文字であり、中外估錢が税種に相当することになる。じじつ、このような税種+「具錢」という表記は他にもいくつか見られる。⁽¹⁷⁾

ス[□]合租具錢七萬五百收[□][□][□]萬三千四百卅[□]

(壹四四三五)

セ 廿四萬四千八百二年市具錢 [□]

(壹六〇三〇)

ソ[□][□][□]牛賈?具錢二萬[□]千六百

(參七三四五)

タ入廣成鄉皮具錢三萬三千五百七十二錢

(參七四二八)

チ縣元年領地儻具錢卅八萬七千收佰六萬八千二百九十四錢與本通合卅

(番号不詳)

「吳嘉禾六(二三七)年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事」試釈 關尾

第九十五卷 三九

ツ縣元年領大女劉綺臧具錢二萬四千收佰錢四千二百卅五

(番号不詳)

このうち、ソの買具錢とチの地僦具錢については、それぞれ買行錢(參七三四四)、地僦行錢(參七四二九)という表現もあるので、錢納の税種については、単に税額だけではなく、錢貨の品質も問題とされることがあったことがわかる。またこのうち最も頻出するのは地僦錢であるが、これについては、宋超氏がいち早く注目し、臨湘県の城外に拡がる丘ではなく、城内(邑下)に居住して商業経営活動に従事する吏・民が、その活動用に土地と家屋を賃租したために、一律に月額五〇〇錢を納入したものと解した〔宋二〇〇四(宋二〇一二)〕。その納入の督促には市吏が当たっていることもあり、宋氏の理解はおおむね妥当と思われる。⁽¹⁸⁾

本牘の中外估錢が私的な奴婢売買を対象に賦課された税負担であることは、本牘やウ・オ・キなどから明らかだが、都市史がその徴収を担当しているという点で、市吏が関与している地僦錢と税種としては近縁関係にあったと言うことができよう。そして中外估錢のさらなる理解については、『隋書』卷二四食貨志の記事が有力な手がかりを与えてくれる。⁽²⁰⁾

テ晉自過江、凡貨賣奴婢・馬牛・田宅、有文券。率錢一萬、輸估四百入官。賣者三百、買者一百。無文券者、隨物所堪、亦百分收四。名爲散估。歷宋・齊・梁・陳、如此、以爲常(晉、江を過りてより、凡そ奴婢・馬牛・田宅を貨売するに文券有り。率ね錢一萬に、估四百を輸りて官に入る。賣る者は三百、買う者は一百なり。文券なき者は、物の堪える所に隨い、亦た百分して四を収む。名づけて散估と爲す。宋・齊・梁・陳を歴るに、此の如くして、以て常と爲す)。

東晋から南朝にかけての時期、江南地方では、奴婢をはじめ馬牛や田宅などを売買する場合には券契（文券）を作成し、売買価格一万錢につき錢四百、つまり四％を官に納入すること、その場合、売り手が三百、買い手が百という三対一の割合で負担すること、そしてそれが「估」と呼ばれたことなどが、この記事からわかる。券契は、売買価格を把握するための証拠物件として必要だったものと思われる。本牘に見える中外估錢がこの「估」の先駆的な税負担であったことは容易に推測されよう。既に江南では、呉の時代から奴婢売買には中外估錢と呼ばれる税負担が課されていたのである。⁽²¹⁾ただ価格に対するその比率は本牘から判断する限りでは、一割という高率であった。ウ・キによると、さらに高率だった可能性さえ考えられる。⁽²²⁾しかもこれを官に納めるのは売り手ではなく、買い手のほうであった。少なくとも買い手が納入の責任を負っていたらしいことがウ・オ・キからわかる。

また呉から東晋・南朝を通じて、同じような制度が維持されていたことから考えて、奴婢の私的な売買が一貫して広く（少なくとも、馬牛や田宅と同じ程度には）行われていたことが推測される。⁽²³⁾実際にウ・オ・キの三件の売買では、売り手と買い手の計六名のうち、男丁（男子、ともに買い手）と女丁（大女、ともに売り手）が各二名、士⁽²⁴⁾（売り手）と県吏（本牘では郡吏、買い手）が各一名で、一般の民戸が過半を占めている。彼らが奴婢を所有していたのである。⁽²⁵⁾

ところで、私奴婢は「戸下奴」・「戸下婢」として、その所有者の名籍に附されていたことが明らかになっている。いずれも吏・民に所有されたものである。竹簡「肆」から例示しておく。

ト□□戸下奴□年十二

（肆四四六四）

ナ 和戸下奴西奴年十五

(肆四四七九)

ニ □家口食九人 戸下婢有年廿五

(肆五七〇)

ヌ 戸下婢房年卅

(肆五八二)

ネ 泰戸下婢好年十二

(肆四四七)

鈴木直美氏は、このような奴婢の名籍への登記は秦代までさかのぼり、登記の理由は奴婢の「算事」をその所有者に負担させるためだったとしている〔鈴木二〇〇二（鈴木二〇一二）⁽²⁶⁾〕。呉の時代、奴婢は引き続きその所有者の名籍に附載されると同時に、財産として売買され、その価格が官によって把握され、価格に応じて中外估銭が売買の当事者に賦課されていたのである。

ウ・オ・キによると、このような奴婢の価格は、奴と婢とを問わず、具銭で四〇六万銭であつた。後漢時代に、奴婢の評価額が一人当たり平均四万銭という例があり⁽²⁷⁾、ほかならぬ長沙呉簡の中にも、以下のような例がある。

ノ 領郎中王毅所買生□買錢二萬七千三百六十五錢

(肆一二二三)

ハ 領督軍糧都尉陳□所買生口買錢四萬五百九十

(肆一二二六)

ノはやや低額だが、ハはウとキのちょうど中間に位置しており、妥当な額だったと考えられる。また嘉禾五（二三六）年の吏民田家煎によると、熟田に賦課される銭は畝当たり八〇銭なので、奴婢の価格は、おおよそ熟田五〇七頃分の銭と同額となる⁽²⁸⁾。また戸品出銭簡に見えている銭の納入額は、上品の戸で一万二千〇一万三千銭なので〔安部二〇一二〕、奴婢の価格はその四〇五倍程度に相当する。これらの税負担と比較すれば、奴婢の価格がけつして低

額ではなかったことが理解されよう。

三 形 式

さて本牘は、都市史の唐玉から金曹（掾）に宛てられた上行文書だが、嚴耕望氏によると、宛先となった金曹は漢代、列曹の一つで錢布・銅鉄や市租などを担当し、掾・史が配されていた「嚴一九六二」。呉がこれを踏襲したことは疑いない。⁽²⁹⁾ また都市史であるが、こちらも嚴氏によれば、漢代（都）市掾や市吏などが諸史料に見えていて、市籍や物価のほか、市の治安維持も職掌としていた。呉の都市史や市吏は彼らの職掌を引き継いだものである。⁽³⁰⁾ すなわち私奴婢の売買の掌握と売買に対する中外估錢の徴収は都市史の職務であり、徴収された中外估錢は金曹の管理下に置かれたのである。都市史と金曹との関係は、前者が後者の外局のような存在だったのではあるまいか。⁽³¹⁾ また本牘によれば、徴収された中外估錢自体は、都市史から直接臨湘侯国の庫に送られたようである。おそらく吏・民が納入したその他の錢・物とともに庫に収納されたのであろう。本牘は送り状であると同時に、金曹から中外估錢の徴収を指示する勅を受けた都市史が、その指示を忠実に果たし終えたことを、具体的なデータとともに金曹掾に対して報告した報告書だったことがあらためて感得されよう。

ところで、本牘が狭義の文書、それも上行文書と判断される根拠は二か所に記された「白」字であるが、高村武幸氏は、この文字が本来は私的な書信に用いられるものだったことを指摘している「高村二〇〇九」。漢代、公的な上行文書には「敢言之」の三字が常用されていた。呉簡の中にも、この三字が用いられた上行文書を見出すこと

ができる。

ヒ□禾元年九月乙丑朔廿日甲戌臨湘侯相靖丞祁叩頭死罪敢言之

(壹四三九六正)

□掾石彭

(壹四三九六背)

府前言絞促市吏□書收責地儼錢有人言靖叩頭死罪死罪案文書輒絞促□

(壹四三九七)

絞促後吏李珠隨月收責有人復言靖誠惶誠恐叩頭死罪死罪敢言□

(壹四三九八)

この三枚は、内容的に関連しており、写真から編綴痕も確認できるので、冊書を構成していたと考えられている。⁽³²⁾ おそらく左のような地儼錢の納入者を列記した本文簡の最後に付された送り状であろう。

フ郡士馬伯儼錢月五百 郡士朱主儼錢月五百 郡士王徹儼錢月五百

(壹四三九〇)

ヘ大男榮闡儼錢月五百 大男史侯儼錢月五百 大男趙阿儼錢月五百

(壹四四〇一)

ここで注目すべきは、この冊書が、臨湘侯相の某靖と丞の某祁を連名で発信者とする上行文書であるという点である。となると、宛先は長沙郡府以外には考えられない。つまり県（臨湘侯国）と郡という異なった官府間で交わされた文書（正確にはその写しか）だったのである。一方それに対して本牘は、冒頭の「叩頭死罪」や文末の「誠惶誠恐叩頭死罪死罪」といった文言に比との共通性が認められるものの、あくまでも臨湘侯国の官府内で機能した上行文書であった。呉簡中には、本牘のように、「白」を用いた上行文書（以下、「白文書」と略記）が何点か確認できる。⁽³³⁾ 代表的なものを掲げてみる。

ホ模郷大男謝牒新戸中品出錢九千臨湘侯相 嘉禾五年十二月十八日模郷典田掾丞若白

(肆一三八五)

マ模郷大男悉忠新戸下品出錢五千五百九十四錢臨湘侯相 嘉禾五年十二月十八日模郷典田掾烝若白（肆一三九四）

ミ南郷勸農掾番琬叩頭死罪白被曹勅發遣吏陳晶所舉私學番

倚詣廷言案文書倚一名文文父廣奏辭本郷正戸民不爲遺脱輒

操黃簿審實不應爲私學乞曹列言府琬誠惶誠恐叩頭死罪

死罪 詣 功 曹

十二月十五日庚午白（丁二二一六九五）

ム州中倉吏郭勲馬欽張曼周棟起 十月十一日訖十三日受五年租稅襍 限米合七百五十九斛二斗五升

其七百一十五斛七斗五升五年稅米

其五斛五年租米

其卅二斛五年佃帥限米

其六斛五斗五年吏帥客限米 十月十三日倉吏潘慮白（番号不詳）

メ君教 丞「紀」如掾録事掾 潘「琬」典田掾烝「若」校

主記史梅（梅）「綜」省 嘉禾五年三月六日白

四年田頃畝收米斛數革（番号不詳）

このうち、ホ・マは戸品出錢簡と呼ばれる竹簡で、郷担当の典田掾から臨湘侯相に宛てられたもの、ミは郷担当の勸農掾から臨湘侯国の功曹（史）に宛てられたもの、ムは倉吏（倉曹掾）からおそらくは臨湘侯相に宛てられた

「吳嘉禾六（二三七）年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事」試釈 關尾 第九十五卷 四五

もの、そしてメは臨湘侯相の指令（君教）を受け、点校を担当した丞以下、諸掾吏が自署して（自署を「」で示した。主記史の姓の梅は誤りで、正しくは梅）再度臨湘侯相に宛てたものと考えることができる。⁽³⁶⁾このように白文書はいずれも臨湘侯国の官府内部で上行文書として機能したのであった。だからこそ、必ずしも「叩頭死罪」とか「誠惶誠恐叩頭死罪死罪」とかいった丁寧語を伴うわけではなく、またミ・ムのように、発出年次を欠き、月日だけの場合もありえたのである。このような白文書が、これ以降地方官府の内部で広く用いられたことは、五胡時代のトゥルファン文書からもうかがえるが、本牘も丁寧語を伴いながらも月日だけを記すという点において、ミと同じ体裁を有していることがわかる。

もつともミの場合、勸農掾から功曹史に宛てたものだった。いわば列曹の上位にあった功曹史に、列曹に準じた位置にあった勸農掾から送達されたわけだから、⁽³⁸⁾上行文書の体裁が採用されたのは必然であつたろう。しかし本牘の場合、列曹の一つである金曹掾に宛てて、その外局に過ぎないような都市史から送達された文書だったわけで、そのような場合でも同じような体裁の白文書が用いられたのである。本牘は、白文書が、一つの官府の内部における上行文書として広く利用されていたことを端的に示していると言うことができよう。⁽³⁹⁾

おわりに

以上、本稿では、竹簡「肆」に収録されている「呉嘉禾六（二三七）年四月都市史唐玉白收送中外估具錢事」について、出土状況、内容、および形式に分けて検討してきた。出土状況について検討した第一節の最後に、なぜ本

牘が名籍簡を主体とした塊に混在していたのか、という問題を保留しておいたが、最後にこの問題についての見通しを述べて、本稿を結びたい。

名籍は通常であれば、県に相当する臨湘侯国の戸曹に保管されていたはずである。一方本牘は、都市史から臨湘侯国の金曹に宛てられた文書であり、表題簡や本文簡とともに一括されて金曹に保管されていたはずである。それがなぜ同じ塊を構成していたのであろうか。

石原遼平氏によれば、呉簡中には、里で作成された、「右」字で始まる集計簡を有する名籍と、これを基礎にして郷で作成された、「凡」字で始まる集計簡を有する名籍とが含まれているという「石原二〇一〇」。つまり県に相当する臨湘侯国には二種類の名籍が集約・管理されていたのである。里で作成された名籍までが県に送達されたのは、不正や間違いを防ぐためというのが石原氏の考えだが、とすれば、戸下奴・戸下婢として戸ごとに附籍されている私奴婢に関しても、最新かつ正確な情報を戸曹が求めたであろうことは想像に難くない。言うまでもなく、所有権の移動を伴う私奴婢の売買は、生死や逃亡と同じく、名籍に修正を施す事由となりうる。本牘はどのような修正を施すための資料の一つとして用いられたとは考えられないだろうか。つまり金曹に保管されていた本牘と、本牘を送り状としていた表題簡と本文簡とが、戸曹に転送され、名籍の修正作業に使われたということである。⁽⁴⁰⁾この推測には、同じ塊に含まれているいくつかの名籍簡が手がかりを与えてくれよう。

モ□里戸人公乘文舎年□四 □民

(肆一七四二)

ヤ 妻汝年十六第一

(肆一七二六)

ユ 妻汝年冊第一

(肆一七五二)

ヨ 郡子女汝年六歳

(肆一七五二)

モは、ウの文銭と同姓の文舎の名籍簡、ヤ・ヨは、オの依汝と同名の某汝の名籍簡である。文銭は士身分なので、モの文舎と同じ戸を構成していたとは考えがたいし、ヤ・ヨの某汝はいずれも戸主（戸人）ではないので、全て直接的な関係を想定することは困難なものばかりだが、これら陽貴里の名籍に附された吏・民が売り手となったがために、当該の名籍から奴婢を削除するための資料として、本牘や関係の竹簡が一括して保存され、やがて一括して廃棄されたと考えれば、かかる出土状況も理解できるのではあるまいか。これらの名籍簡が嘉禾五（二三六）年、ないしは本牘と同じ翌六（二三七）年のものである可能性が高いことは、⁽⁴¹⁾右のような推測を補強してくれるだろう。

註

(1) 本牘の表題は、吐魯番出土文書整理小組によるトゥルファン文書の定名方法に従った。また本牘については、竹簡「肆」「整理組（編）二〇一一・上冊凡例」と、『湖南長沙三国呉簡』「宋（主編）二〇一〇」第一冊に、カラー写真が収録されており（後者の表題は「収私人売買生口中外估具錢書」、本稿ではこれらを参照した）。

(2) 本稿は、平成二一～二五年度科学研究費補助金・基盤研究（A）「東アジア木簡学の確立」（研究代表者・角谷常

子奈良大学教授／課題番号二二二四二〇二三）による研究成果の一部である。

また本稿は、平成一六～一八年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「長沙走馬楼出土呉簡に関する比較史料学的研究とそのデータベース化」（研究代表者・關尾／課題番号一六三二〇〇九六）、ならびに平成二〇～二三年度科学研究費補助金・基盤研究（A）「出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析」（研究代表者・關尾／課題番号二〇二四二〇一九）

により作成したデータベースに多くを依拠している。伊藤敏雄氏をはじめ、作成を担当された両プロジェクトのメンバーをはじめとする関係各位、ならびに本稿作成にあたって貴重な教示を賜った安部聡一郎氏に謝意を表したい。

(3) 二六の塊それぞれの規模と簡単な内訳については、別稿「關尾（待刊）」を参照されたい。

(4) 一七五六は、「 $\square\square$ 里……丘……」と釈読されており（編綴痕を有す）、吏・民の所属単位である里と居住単位である丘を併記する異色な内容を有していた可能性がある。

(5) 雷姓は、東扶丘を中心に比較的多く見られる姓である〔満田二〇〇一〕。

(6) ただし本牘には売買価格の合計が一九万錢とあるのに對し、ウ・オ・キ三枚の合計額は一五万錢にしかならず、この点に矛盾があるが、理由については保留したい。

(7) 写真からは書風がわからない。ただ簡の長さはオがカ・キよりもやや短く、奴婢の売買額と中外估具錢との比率から、キとカが接続していた可能性が高いが、李均明・宋少華両氏は、オとカが接続していたとする〔李・宋二〇〇七〕。なお竹簡「肆」には左記のような竹簡も収録されている。

□具錢一萬四千九百七十五錢

（肆一五〇二）

キとカが接続していたとすると、これがオと接続していた可能性も考えられるが、エとカが簡の上端から書写されているのに對し、これは句末を下端に合わせており、かつエ・カと合わせた（中外估）具錢の合計額が本牘の一万九千を大幅に上回ってしまうので、否定的にならざるをえない。

(8) 蔣福亞氏は、長沙呉簡では、私奴婢が戸下奴・戸下婢と呼ばれたのに對し、官奴婢が生口と呼ばれたとする〔蔣二〇〇六（蔣二〇一二）〕。この蔣説に従えば、これは官奴婢の売買ということになるが、名籍で奴婢が戸下奴・戸下婢と呼ばれているのは、特定の戸に附籍されているからであり、売買により所有権が移動し、附籍が完了していない段階では、このような呼称は用いられるべくもない。本稿の行論全体が蔣氏の所説への批判である。

(9) イについては判然としないが、他の五枚については、編綴箇所を避けて文字が書写されていることが写真から明らかである。

(10) 漢代の簿籍に関する理解については、永田英正氏の成果〔永田一九八九〕に多くを負っている。

(11) 釈文は、写真「編委（編）二〇〇五・一九五頁」を参照して修正を施した。

(12) 荊の本質については、別稿「關尾二〇二三」で検討した。あわせて参照されたい。

(13) 編綴痕の下には文字がなく、最初から編綴箇所を意識して書写されたと考えられる。

(14) 『竹簡』「肆」に収録されている本牘以外の四枚の簡牘のうち、少なくとも三九〇四(一)、四五二三(一)の二枚は、「爲簿如牒」なる句が確認されるので、簿籍に附された送り状だったと考えられる。いずれも編綴痕が鮮やかに残っている。

(15) クの場合、それ自体が荊だったので、単独で保存されることに不自然はない。しかし本牘の場合、報告書としての側面があったにせよ、なぜ木牘が使われたのか、なお疑問は残る。残念ながら大きさは不詳だが、移録したように、本牘は大きな余白を残している。あるいは当初から報告に対する判語が書き入れられることを想定してこのような木牘が用いられたと考えることもできるが、仮説の域を出るものではない。

(16) 県に所属する勸農掾を、特定の郷を担当するがゆえに、郷吏と呼ぶ例(肆四三二五、四三二六、四三二七、四三二四一など。郷吏とされた蔡忠は、平郷と小武陵郷担当の勸農掾であった)が示しているように、吏に冠される行政単位

は必ずしも所属する単位ではない。

(17) 以下の六枚のうち、チ・ツの二枚の写真と録文については、「宋(主編)二〇一〇」第三冊を参照されたい。そこの表題は、「收佰錢簿」となっている。

(18) 根拠となるのは、左の竹簡である。

府前言絞促市吏□書收責地僦錢有人言靖叩頭叩頭死罪死罪案文書輒絞促□ (壹四三九七)

(19) 王子今氏は宋氏の理解を支持するが「王二〇〇六」、李均明氏は地僦錢の納入者に大男や大女に混じり、部司馬や郡士などが含まれていることを根拠に、宋氏の理解を否定しないまでも、やや懐疑的である「李二〇〇六」。なお郡士については、註(24)を参照されたい。

(20) 本記事の解釈については、堀敏一氏による成果「堀一九八七」を参照した。

(21) 実際には、估錢というのが税種の名称で、「中外」の二字はこれを形容しているのだろうが、意味を捕捉できない。あるいは出入と同義で、売り手と買い手双方という意か。

(22) ウ・エが接続するのであれば、中外做具錢は売買価格の二割、キ・カが接続するのであれば、一割八分となる(したがってこの二件だけでも、総額の一万九千のうち、

一万七千に達してしまうのも問題であろう。全ての奴婢売買に一律ではなかったことも、指摘しておきたい。

(23) 西北地方の事例だが、トゥルファン出土の「前秦建元廿(三八四)年三月高昌郡高寧縣都郷安邑里戸籍」(ÖS TSYM4:5:12)〔榮他(主編)二〇〇八・一七六―一七九頁〕には、奴婢や田土の所有権の移動が註記されている。内訳は田土が一五件に対して奴婢が四件である(馬牛はなし)。なお本戸籍の詳細については、別稿「關尾二〇〇八」を参照されたい。

(24) 士については、多くの先行研究があるが、嘉禾四(二三五)年の吏民田家朔によると、樸丘に集住しつつも、熟田に課せられた負担を免除されており、特権的な存在だったことがわかる。ただしその本質を、「説書人」とする理解「高二〇〇〇(高二〇〇八)」「胡二〇〇一(胡二〇一二)」と、それを否定して兵士とする理解「張二〇〇七」とに大きく分かれている。

(25) 六人の売り手と買い手の名は本文で紹介した簡牘以外には見られない。わずかに都市史の唐玉が、嘉禾元(二三二)年の賦税納入簡(貳二六九)に長坑丘に居住する吏として、また年次未詳の富貴里の名籍(壹四七二)に公乗の戸主(戸人)として見えているにすぎない。

なお竹簡「壹」に収録された名籍簡に依拠して、陳爽氏は、一戸当たりの奴婢所有は一人というのが一般的なケースだったとし「陳二〇〇四」、于振波氏は、名籍簡に登録されている全人口のなかで奴婢が占める割合は一・八五%だったとしている「于二〇〇五(于二〇〇七)」。

(26) 鈴木氏が根拠としたのは、里耶秦簡のなかの名籍簡(鈴木氏は「戸籍様簡」と呼ぶ)であるが、このような様式の名籍簡が当時広汎に作成されていたのか、という点については、検討の余地があるように思う。

(27) 「後漢年次未詳簿書殘碑」(一九六六年四川・郫県犀浦二門橋出土)に、五人の奴婢で計二〇万という評価が見えている「徐(主編)二〇〇六・第二冊三九八頁」。該当部分は、「奴□□□生婢小奴生并五人直廿萬」(第八行、「……奴立奴□□鼠并五人直廿萬」(第一〇行)の二か所である。ただし、これは売買価格ではなく財産評価なので、一律一人当たり四万錢だったと考えるべきかもしれない。

なお「後漢永建三(一二八)年六月王孝淵墓碑」が伴出しているためか、丁邦友氏は、本碑の紀年も永建三(一二八)年としている「丁二〇〇九」。

(28) 同年の吏民田家朔は紀年が明記されているものに限っても一二六九枚に上るが、早田も含めて二頃以上の田土を

保有している事例は、五・三四五（県吏松権の二頃三三畝二二〇歩）と、五・一〇七四（鄭喜の二頃一八畝）のわずかに二枚にすぎない。

(29) 嚴耕望氏は、『晉書』卷二四食貨志の記事から、金曹は、晋代にも県の列曹の一つとして設けられていたとする「嚴一九六三・上冊三四一頁」。漢から晋を通じて設置されていたのであろう。なお呉簡には、金曹の吏として金曹掾・金曹史が見えている「徐二〇一一」。

(30) このほか、呉簡には市掾も見えている。

□□已出五十萬一百四錢付市掾潘玆史李珠市嘉禾二年布 (参八三九六)

(31) 嚴耕望氏は、県の列曹として金曹に次いで市掾を掲げるが、両者の関係についてはふれるところがない。近年、新たな出土資料を博搜して嚴氏の成果を補訂した紙屋正和氏も金曹に次いで市を掲げるが「紙屋二〇〇九・五六五頁表Ⅶ」、事情は同じである。徐暢氏は、前註に掲げた参八三九六簡を根拠にして、金曹は、市を管理して「市場税」を徴収するなどの業務において、市掾と密接な協力関係にあったと言うが「徐二〇一一」、両者の統属関係については、曖昧なままである。

(32) 本冊書の性格と内容に対する理解については、高村武

幸氏の成果「高村二〇〇四」に負っている。

(33) 以下に掲げる五枚のうち、ミ以下の三枚は木牘だが、その写真には、ミが「西林（監修）二〇〇四」、ム・メが「宋（主編）二〇一〇」第六冊・第五冊にそれぞれある。

なおそこでの表題は、ミが「倉吏領受租税襍米書」、ムが「校布・米數書」となっている。

(34) 戸品出錢簡の詳細については、安部聡一郎氏による成果「安部二〇一一」を参照されたい。

(35) への内容については、高村武幸氏の成果「高村二〇〇四」を参照されたい。

(36) 図録「宋（主編）二〇一〇・第五冊二八頁」は、最後の文字を「草」と釈読しているが、本稿では「蒞」に通じる「草」と解釈した。その直上の「田頃畝收米斛數」こそは吏民田家蒞に記載されるデータだからである「關尾二〇一三」。嘉禾四年の吏民田家蒞の場合、田戸曹史による校閲日は吏・民が居住している丘によってまちまちだが、嘉禾五年三月三日のものが最多を誇っている「關尾二〇〇一」。これらが臨湘侯相の指令により、さらに承以下の点校を経た可能性は充分に考えられる。

(37) 北涼政權時代に高昌郡の兵曹掾・兵曹史が連名で太守に宛てた上行文書が多数出土している。いずれも白文書だ

が、もはや「叩頭死罪」・「誠惶誠恐叩頭死罪死罪」といった丁寧語は全く見られない。「關尾二〇〇九」。

(38) 功曹については、嚴耕望氏のみならず、紙屋正和氏も「綱紀」の筆頭に置いているが、勸農掾については「列曹」に含まれるものの、具体的な位置づけとなると、よくわからない。勸農掾については、『續漢書』百官志五に、「本注曰、諸曹略如郡員、五官爲廷掾、監鄉五部、春夏爲勸農掾、秋冬爲制度掾」とあり、『晉書』卷二四職官志に、「郡國及縣、農月皆隨所領戸多少爲差、散吏爲勸農」とあるのが、ほとんど全てだからである。

(39) 呉の時代、旧来の表現「敢言之」を含む上行文書はもはや同一の官府内部で使われなくなっていたと断言するだけの材料は現時点ではない。ただこれよりも略式とも言うべき白文書が、例えば郡と県といったような異なった官府間で用いられた可能性はほとんど考えられないと思う。

(40) もちろん、本牘も表題簡・本文簡も正文ではなく、写しであった可能性が充分に予想される。売買価格と中外估具錢の、本牘と本文簡とでの不一致もそれ故と考えれば、理由がある程度説明できるが、写真からはその正否は確認できない。

(41) 塊 I c 1 ①に含まれる名籍にはいずれも紀年がなく、

造籍年次は不明である。しかし竹簡「肆」に収録された他の名籍簡の塊、例えば I a ①（簡番号一〇二二五）、I a ②（二二六〇五三三）、I a ③（五三四〇六五三）、および I a ④（六五四〇七九四）などはいずれも嘉禾五（二二二六）年と翌六（二二二七）年の名籍簡から構成されている。賦税納入簡の場合もやはり I b ①、I b ②、I c 1 ②、I c 2 ①、および I c 2 ③など塊を構成しているものは、嘉禾元（二二三二）年簡に集中している（唯一 I c 2 ②だけは、翌二（二二三三）年簡の塊であった）「關尾（待刊）」。したがって、I c 1 ①の塊を構成している名籍簡も、他の塊を構成している名籍簡と同じように、嘉禾五年ないしは六年のものと判断して問題なからう。

釈文・図録（筆画順）

中国簡牘集成編輯委員会（編委）

二〇〇五（編）『中国簡牘集成』第三冊・図版選卷上、敦煌文芸出版社。

西林昭一

二〇〇四（監修）『湖南省出土古代文物展「古代中国の文字と至宝」』、毎日新聞社・（財）毎日書道会。

宋少華

二〇一〇 (主編)『湖南長沙三国呉簡』全六冊、重慶出版社・中国簡牘書法系列。

長沙市文物考古研究所・中国文物研究所・北京大学歴史学系走馬楼簡牘整理組(整理組)

一九九九 (編)『長沙走馬楼三国呉簡 嘉禾吏民田家別』全三冊、文物出版社。

二〇〇三 (編)『長沙走馬楼三国呉簡 竹簡』[壹]全三冊、文物出版社。

長沙簡牘博物館・中国文化遺產研究院・北京大学歴史学系走馬楼簡牘整理組(整理組)

二〇一一 (編)『長沙走馬楼三国呉簡 竹簡』[肆]全三冊、文物出版社。

長沙簡牘博物館・中国文物研究所・北京大学歴史学系走馬楼簡牘整理組(整理組)

二〇〇七 (編)『長沙走馬楼三国呉簡 竹簡』[貳]全三冊、文物出版社。

二〇〇八 (編)『長沙走馬楼三国呉簡 竹簡』[参]全三冊、文物出版社。

徐玉立

二〇〇六 (主編)『漢碑全集』全六冊、河南美術出版社。

榮新江・李 肖・孟憲實(榮他)

二〇〇八 (主編)『新獲吐魯番出土文獻』全二冊、中華書局。

主要参考文献

『日文・五十音順』
安部聡一郎

二〇一一 「走馬楼呉簡中所見「戸品出銭」簡の基礎的考察」、藤田勝久・松原弘宣(編)『東アジア

出土資料と情報伝達』…七七～九九頁、汲古書院。

石原遼平

二〇一〇 「長沙呉簡名籍考―書式と出土状況を中心に―」、
『中国出土資料研究』第一四号…五九～八五頁。

紙屋正和

二〇〇九 「河漢時代における郡府・県廷の属吏組織と郡・県関係」、同氏『漢時代における郡県制の展開』…五三七～五九五頁、朋友書店。

鈴木直美

二〇〇二 「前漢初期における奴婢と戸籍について」、池

田雄一（編）『奏瀝書——中国古代の裁判記録』…一五八～一七二頁、刀水書房。

二〇二二 『中国古代家族史研究——秦律・漢律にみる家族形態と家族観——』、刀水書房。

關尾史郎

二〇〇一 「長沙呉簡所見「丘」をめぐる諸問題」、『嘉禾吏民田家朔研究——長沙呉簡研究報告・第一集』…四二～五四頁。

二〇〇六 「長沙呉簡中の名籍について——史料群としての長沙呉簡・試論（二）——」、『唐代史研究』第九号…七三～八七頁。

二〇〇八 「トゥルフアン新出「前秦建元廿（三八四）年三月高昌郡高寧縣都郷安邑里戸籍」試論」、『人文科学研究』第二二三輯…横一～一九頁。

二〇〇九 「五胡」時代、高昌郡文書の基礎的考察——兵曹関係文書群の検討を中心として——、土肥義和（編）『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』…一八三～二〇〇頁、（財）東洋文庫。

二〇一三 「破朔・別朔考——長沙呉簡を例として——」、藤田勝久（編）『東アジアの資料学と情報伝達』、汲古書院（刊行予定）。

（待刊）

「出土状況よりみた賦税納入簡——『長沙走馬樓三國呉簡竹簡』「肆」所收簡による試論——」（投稿中）。

高村武幸

二〇〇四 「長沙走馬樓呉簡にみえる郷」、『長沙呉簡研究報告』第二集…二四～三八頁。

二〇〇九 「漢代文書行政における書信の位置付け」、『東洋学報』第九一卷第一号…一～三三頁。

永田英正

一九八九 「簿籍簡牘の諸様式の分析」、同氏『居延漢簡の研究』…三二七～四〇八頁、同朋舎出版。

堀 敏一

一九八七 「部曲・客女身分成立の前提——六朝期隸属民の諸形態——」、同氏『中国古代の身分制——良と賤——』…二四七～二八一頁、汲古書院。

満田 剛

二〇〇一 「長沙走馬樓吏民田家朔に見える姓について」、『嘉禾吏民田家朔研究——長沙呉簡研究報告第一集』…八〇～九三頁。

〔中文・筆画順〕

丁邦友

二〇〇九 『漢代物価新探』、中国社会科学出版社。

于振波

二〇〇四 『走馬樓吳簡初探』、天津出版社。

二〇〇五 『略論走馬樓吳簡中的「戸下奴婢」』、『船山學刊』二〇〇五年第三期・八二、八五頁。

二〇〇六 『走馬樓吳簡習語考釈』、『考古』二〇〇六年第一期・六六、七三頁。

二〇〇七 『走馬樓吳簡統探』、天津出版社。

王子今

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

二〇〇六 『長沙走馬樓竹簡“地儼錢”的市場史考察』、長沙市簡牘博物館・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第二輯・二三二、二四四頁、崇文書局。

王素

二〇〇九 『長沙吳簡勸農掾条列軍州吏等人名年紀三文

宋超

二〇〇四 『吳簡所見“何黑錢”、“儼錢”与“地儼錢”考』、北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第一輯・二三六、二四八頁、崇文書局。

二〇一四 『秦漢史論叢』、中国社会科学出版社。

二〇一四 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

二〇〇六 『走馬樓吳簡“地儼錢”考』、卜憲群・楊振紅（主編）『簡帛研究』二〇〇四・三四七、三五三頁、廣西師範大學出版社。

疑―読長沙走馬樓簡牘札記之四」、「文物」二〇〇〇年第一期・七九～八四頁。

二〇〇八 「長沙走馬樓簡牘研究」、廣西師範大學出版社。

徐暢

二〇一一 「走馬樓簡所見孫吳臨湘縣廷列曹設置及曹吏」、長沙簡牘博物館・北京大學中國古代史研究中心・北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第三輯（前出）…二八七～三五二頁。

張文杰

二〇〇七 「走馬樓吳簡《吏民田家苑》中的「士」、「興大歷史學報」第一八期…四七～六二頁。

陳爽

二〇〇四 「走馬樓吳簡所見奴婢戶籍及相關問題」、北京吳簡研討班（編）『吳簡研究』第一輯（前出）…一六〇～一六六頁。

蔣福亞

二〇〇六 「長沙走馬樓吳簡所見奴婢雜議」、「首都師範

大學學報」二〇〇六年第六期…一～六頁。

二〇一二 「走馬樓吳簡經濟文書研究」、國家圖書館出版社。

嚴耕望

一九六一 「中國地方行政制度史 秦漢地方行政制度」、中央研究院歷史語言研究所。

一九六三 「中國地方行政制度史 魏晉南北朝地方行政制度」全二冊、中央研究院歷史語言研究所。

（附記）本稿校正中に、伊藤敏雄氏より「長沙吳簡中の生口売買と「估錢」徴収をめぐる」―「白」文書木牘の一例として―」（『歴史研究』第五〇号、二〇一三年三月）の惠贈を受けた。本稿でも取り上げた木牘について、多くの関連史料や先行研究によりながら詳細な検討が行われており、あわせて参照願いたい。

（新潟大学人文社会・教育科学系教授）